

# 所在不明や 孤独死防げ



室外に設置された自動点滅式非常灯を視察する  
党神奈川県議団のメンバーら

## 神奈川県と 桐蔭横浜大学 高齢者の安否確認で実証実験

神奈川県は桐蔭横浜大学と共同で2011年度から、高齢者の単身世帯などを対象に振動センサーで居住者の安否を確認できるシステムを用いた実証実験に取り組んでいる。公明党神奈川

### 公明も強力に後押し

今回の実証実験は、ロボット技術などを活用して高齢者の異変を早期に発見する仕組みをつくることで、高齢者の所在不明や孤独死を防ぐとともに、介護従事者や高齢者の見守り活動を行う自治会などの負担を軽減することが狙い。

センサーは日常生活で生じる振動を感知するもので、桐蔭横浜大学工学部ロボット工学科の森下武志准教授らが開発。県営住宅の空き部屋を利用した予備実験を経て、1月10日から同団地で本格的な実証実験に着手した。

センサーシステムは2世帯の単身高齢者宅に導入。いずれも台所の流し台の下に振動を感知するセンサーを設置し、無振動状態が一定時間続くと、室外に取り付けられた青色の自動点滅式非常灯が点滅し、近隣住民に異常を知らせる仕組みだ。

このうち1世帯のシステムには、無振動状態が一定時間続くと「注意を知らせるメール」を、さらに無振動状態が続けば「警告メー

ル」を、それぞれ血縁者らに自動発信する機能も組み込まれている。

2年間を予定している事業計画では、今年度の実験結果などを踏まえ、今後の実験方法について検討した上で、12年度の実験を具体的に進めていく方針。森下准教授は「豊かで安心して暮らせる社会を築くには、技術や機械をつまく活用した新しい社会づくりが重要」と指摘。新たなシステムを開発することによって、高齢者の見守り支援などを可能にする地域社会づくりに広く役立てたい考えだ。

森下准教授らの説明を受けた鈴木団長らは、福祉関係者や企業、大学などと県が連携して、介護業務の補助や高齢者の自立支援に役立つロボット技術を有効に活用するよう訴えてきた立場から、介護現場のニーズに合ったロボット技術の開発や普及につながる取り組みについて、今後も強力に後押ししていく意向を関係者に伝えた。

## 単身世帯に振動センサー 非常灯やメールで 近隣に異常知らせる